

PMR資格試験への挑戦 5

自分を語る言葉を P2M の経験知で磨く

松山 博輝

■ 受験動機

2024年6月にPMSを取得後、PMRについては気になっていたが、しばらく様子見だった。自分にとっての意味づけができていなかったからだ。P2Mの考え方は業務にも適用し、その価値も実感することができていたため、それで十分ではないかと思っていた。

いくつかの出来事が重なり、2025年4月に会社員からフリーランスに転身したが、このとき実感したのが、「自分を語る言葉を1つでも多く、できれば客観的に」ということだ。フリーランスという不確実な状況に身を置くことで、初めてP2M実践者の証明として、PMRを強く意識するようになった。

■ 受験の感想

過去問題が非公開であることや論述・演習・面接で多角的に評価を受ける形式は、他の資格試験とは異なる一面を持っている。試験対策の進め方は全てが自分に任されているし、試験官も相当のコストをかけて評価に臨む。受験者にとっても試験官にとっても、一次試験、二次試験ともに、一言でいえばタフな試験である。

受験を迷っている場合は、PMR試験紹介セミナーへの参加を勧めたい。演習問題に取り組み、標準的な回答による解説を受けることで、出題者が問題に込める意図や回答の考え方を知ることができたのは大きい。PMSの試験対策のような、正確な知識をインプットする作業は、PMRの試験対策においては任意でよいと割り切る覚悟を持つことができた。

試験対策でやったことは、手間はかかるがシンプルだ。PMR試験紹介セミナーとPMR養成研修で解いた問題と標準解答を分析し、類題をつくって解き、何を回答することが求められているのかを考察することを繰り返した。なぜその回答が導かれるのかという思考プロセスが大事だと考えたからだ。それ以外には特別なことをしなかったが、それが結果的には功を奏した。一次試験では180分で4題を論述し、二次試験では30分で論述する試験が3回ある。どのようなテーマで何が問われるかも不明だが、どの問題にも回答として押さえておくポイントはある。そのポイントを1つでも多く言語化することが試験対策になった。

二次試験ではグループディスカッションも課される。複数人の中で自己主張することが苦手な自分にとって、どのようにグループに貢献するかを考えることはよい機会だった。ディスカッションの論点整理、別の言葉での言い換え、異なる視点からの発問がディスカッションを生産的にするための自分の持ち味だと割り切って臨んだ。

これをすれば必ず合格できるという秘策はない。だが、ここを外すと失敗するという要点は確実に存在する。それが原理というものではないか。タフなPMR資格試験は、この原理の適用力を見ている試験だと理解している。

■ PMR としての展望

日本の国力を高めるために、より効率的、効果的、魅力的な業務改善を支援することが自身のミッションである。だが、現状は、フリーランスに転身したばかりで、実績も信頼も人脈もない。このギャップを埋めるために、事業基盤を構築し、顧客を開拓し、ビジネスの継続性を高めることが課題だ。社会教育士としての事業プログラムを P2M のフレームワークを適用して定義し、理論と実践の往還を続けていきたい。



【プロフィール】 松山 博輝 (まつやま ひろき)

電機メーカーにて、ソフトウェア開発のプロジェクトマネジメントを推進。現在は独立し、業務プロセス改善コンサルティング、人材育成・組織開発施策の企画・推進・教材開発、プロジェクトマネジメントの導入・伝承支援を事業として提供。

研究ができる社会人を希求し、専門職修士(技術経営)、専門職修士(経営管理)を学ぶ。その後、教育が分かる社会人を目指し、専門職修士(実務教育学)を修了。

文部科学省認定「社会教育士」として、自身の事業モデルに P2M を適用しながら、教育を通じた社会貢献のキャリアを模索中。PMP®保有。